



TITLE:

日本一のクラゲ天国田辺湾(24) カ  
ツオノエボシ

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(24) カツオノエボシ. 紀伊民報  
2011

ISSUE DATE:

2011-07-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180157>

RIGHT:

© 紀伊民報社

# 紀伊民報

2011年(平成23年)7月6日 水曜日 第20633号 (10)

## カツオノエボシ



浮袋を持つ  
カツオノエ  
ボシ (白浜  
町臨海で)

久保田 信

24



「電気クラゲ」の異名を持ち恐れられるのが、カツオノエボシである。刺されると感

電したような痛みが体中を走るのでこの異名が付けられた。時には呼吸困難に陥ることもあるから要注意である。この種の特徴である浮袋はコバルトブルー一色で、海の青色にうまく溶け込んで姿が分かりづらい。さらに人を刺す毒針の詰まった触手は30センチほど伸びる。このため、刺されたとしてもその周囲で浮袋を見つけたのは難しい。

このクラゲの本体は浮袋の真下に垂れ下がっている。ここに餌を捕らえて食べる部分や次世代をつくる生殖部が、林立するように存在している。

浮袋は長さ13センチにもなる。海面にプカプカ浮かんで、風まかせ波まかせ。黒潮に乗って太平洋をぐるぐる回っていて、紀南地方沿岸では晩夏から秋にかけてよく見られる。昔から「お盆を過ぎたらクラゲに気を付けろ」と戒められたものだ。

浮袋内にあるガスの成分は、驚くことに生物にとって有害な窒素と一酸化炭素である。浮袋には左右いずれかに膨らむ肥厚部がある。北太平洋では右に膨らんだタイプが多く、亜熱帯では左タイプが多いとされる。

写真は、今年初めて京都大学瀬戸臨海実験所の北浜に漂着した個体である。カツオノエボシの飼育は難しく、水族館でもなかなか飼えない。水流と酸素が必要なようである。小さな時代はプランクトンとして海中を漂っているらしいが、どれくらいで浮袋を持つてどのように成長するかは未知である。

存在は皆によく知られているが、生態についてはほとんど分かっていない謎多きクラゲである。(京都大学准教授)